

Pyrog 古典的ケース

L嬢は17歳、高熱；舌に分厚い苔、食欲は全くない；骨が痛い；布団が硬く感じるとこぼす。

四六時中うなっている、非常に落ち着きがない；ひとところに長く横になっていることができない。寝返りを打たなくてはいけない；これは、布団が硬いためにそうするのだという。寝返りを打つと少しの間楽になるが、そのうち何度も同じことをする。

彼女は喉が痛いとかぼすが、どこにも痛そうな所はない；

3, 4日のうちに、特に下肢がほとんど麻痺状態になった；

手助けなしには歩くことができず、そのときは麻痺患者のように足を引きずるようにして歩いた。

今や彼女はそんな風になってしまいはっきりと話すことが難しかった。

わたしは彼女が何を言っているのかほとんど理解することができなかった；まるで口の中になにかいっぱい頬ばっているような話し方で、鼻声と区別がつくくらいだった。

彼女は手の施しようがないくらいひどい状態で、調子が悪いし、自分では寝返りも打てないくらいであった。

病後は長い間歩くことができなかった。常にしびれているようだとこぼしていた。常に麻痺が悪化し続けていたため、ある時はもう助からないかのようにも見えた。

Bapt.の非常に高いポテンシーまた、Rhus.も投与されたが好転しなかった。

熱が下がった後も、脈拍は上がり続け、死に近いことを意味しない限り、説明のしようがなかった。体温は正常であるが、脈拍は120だった。この症状からわたしはPyrogenではないかと考えた。

それはよく効き、脈拍は落ち着き、耐え難かった情緒不安も和らいだ。

一粒の効果は長続きせず症状がぶり返したので、もう一粒を処方した。

かなりRhus.に似ていたが、Rhus.は症状を和らげることができなかった。心臓の動きが速い場合は、Pyrogenを思い出すこと。体温が平常あるいは平常以下で、心臓の機能不全があるときである。